



— 今を生きる —

桜井市立三輪小学校 前田 美穂子 さん

私は、小学校で教員をしています。昨年度、「『ハンセン病問題学習教材 心の架け橋』を使った公開授業をしてみないか。」というお話をいただきました。当時、私はハンセン病問題について詳しく知りませんでしたが、この機会に、過去に何があったのか、私に何ができるのかを知りたいと思いました。

■長島愛生園で学んだこと

夏休みに岡山県にある長島愛生園に行きました。長島愛生園歴史館では、ハンセン病についての資料や入所者の方の証言映像を見ました。ハンセン病はらい菌という菌が原因の病気であり、末梢神経がおかされ温度や痛みを感じなくなる、そのため手足や顔面が変形する後遺症が残ることがあるという病気です。しかし、現在は薬が開発されているため、治る病気であり、発病する人はほとんどいないということを知りました。また、証言映像から、あまりにもひどい差別や偏見の実態を知り、腹立たしく悲しくなりました。らい予防法や無らい県運動によってハンセン病患者の方を強制隔離した国や社会は、ハンセン病患者の方からありとあらゆる人権を奪いました。当時、本土と島の間には橋はなく、隔離されたハンセン病患者の方は島から出ることができないようにされていました。それでも、故郷に帰りたいがために泳いで海を渡ろうとし、海で命を落とされた方が何人もいたそうです。また、家族に迷惑がかからないようにと、名前や住所を捨てた人もたくさんいたということを知りました。それは、この世に誕生した自分の存在をまるごと全部消してしまうということです。さらに、結婚しても子どもが産めない身体に手術さ

れたということを知ったときには、心が締め付けられる思いがしました。

■子どもたちとの学び

昨年12月に子どもたちとハンセン病問題の学習をしました。公開授業当日、長島から来ていただいたハンセン病回復者Aさんのお話を聞きました。Aさんは、「私たちは子孫を残すことを許されなかった。だから、私たちがいなくなったらハンセン病問題がなかったことになってしまう。」と、おっしゃっていました。私たちがすべきことは、まずハンセン病について正しい知識をもち、それを周囲に伝え、誤った認識からうまれた偏見や差別をなくすことだと考えます。そしてその上で、ハンセン病回復者やその家族の方々が安心して生活できる社会を築いていくことだと思います。私は、これからも子どもたちと共にハンセン病問題について学び続けようと思います。

春休みに入り、6年生の子どもたちが無事に卒業したことをAさんに伝えました。子どもたちにとってAさんは、自分たちのことを心配したり喜んだりしてくださるおじいちゃんのような存在です。Aさんにはいつまでも元気に活躍してほしいと願っています。

